透明的水

斉藤由貴

透明な水

斉藤由貴（さいとうゆき）
発　行　1992年6月5日初版発行
　　1992年8月15日4版発行
発行者　角川春樹
発行所　角川書店　〒102　東京都千代田区富士見町2-13-3
　　振替　東京3-195208
　　TEL：編集部　03-3817-8451
　　営業部　03-3817-8521
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所

© Yuki Saito 1992, Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信販売課宛にお
送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-04-872704-4　C0093

透明な水――目次

夕方から……5
再　会……19
ため息……35
私の血……51
平成ポルトガル文……69
知らない……83
NOBLE GIRL（ノーブルガール）……99
悪気のない馬鹿な僕ら……115
鏡……131
ディアレスト……147

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

記憶……163
永遠(とわ)の一夜(いちや)……177
羽根のある人……193
はやおき……203
夢……219
二人……233
絶対、欲しい……249
手紙……265
あとがき……280

装丁　田島照久

夕方から

今日は、朝から風が吹いていた。思いどおりにいかない事柄を全て忘れることはやっぱり出来ないと思った。けれど、風上から微かに少年野球の喚声が滑り聞こえてきて、ふうーっと長く静かなため息をつくと、失望を味わう余裕もなく、律はあごをあげた。

とりわけ真っ黒いその髪は姉妹(きょうだい)の中では群を抜いていて、その上どういう具合だかいつも艶々と光を反射していた。それがまるで夕闇に一日の終わりを告げに来るカラスの羽色そっくりで、妹達はケンカをすると、決まって律の少し見える、そして少し見えない所に集まって、カラス、と軽やかな悪意でさざめきあったものだった。

たった今も、夕飯の当番をしていた律は、その可愛らしい妹達とケンカをして家

を飛び出してきたところだった。

今日の夕飯のおかずは、なずなと大根の煮つけたものと、小さな川魚だった。律はそれが好きだったが、妹達は臭(くさ)いから川魚は嫌い、と律の後ろに邪気なく立って不平をこぼした。いつもの彼女達の言い様だった。なのに、何故か今日は腹が立った。思うより先に手が動き、冷たい水の中で魚の冷気と匂いにまみれた赤い手が妹の頬を飛沫を散らしてぱちんと打った。一瞬後には後悔していた。でももう遅い。ごめんなさいと心の中で叫んだと同じくらいの頃あいに、妹達はここぞとばかり、言葉少なでどこかしら妙なよくわからない姉を非難しはじめる。もういいの、あんた達のいいたいことはもうわかっている。別に否定する気もないし、その傍若無人なわがままさを、よっつやいつつ年かさだからって諭すつもりもない。だってあたしは、一から十まであんた達を、うらやましいと思っている。律は、まるで森に迷いこんだ子供をかん高いさえずりで追いはらおうとする小鳥の群れのような彼女らの口の動きを見ていることに耐えられなくなって、銀と白の腹をみせて既にもう泳ぐことなく水の中に横たわる魚をのこして、母親のえび茶のつっかけに足をすべら

せ一瞬カラスのようにそこにとまると、一目散に勝手口から飛び出したのだった。つっかけは、左側の底のゴムの部分が不自然に欠けていたので、気をつけないと転ぶ原因になった。律の家の近くはまだ道が舗装されていなかった。砂利道ではクツが痛みやすいから気をつけんとね、と言って笑った母親の顔がふいに夕陽におぼろに浮かび上がり、しゃぼん玉のように消えた。律は今、歩きにくい左側のつっかけに半分気をとられながら、朝な夕な通学や買い物に往き来した道筋に枯れかけた忘れな草のようにしんなりとした風情でつったっていた。魚のことが思い出された。きっと妹達はあの魚を水から出して水気をとってまな板に塩をいっぱい転がして、それから汁が出はじめたら上手にさっと火からあげて、しぼった大根おろしと一緒に食べて夕飯をすませ、食器を洗いザルに伏せておく、等ということは、万が一思いついても決してやりはしないだろう。きっと自分達の母親が帰ってくるのを待って、何かしら別なものをねだるに違いない。母親がそれを聞くかどうかは別にして、何であれ当番は私なのだ。それをすっぽかしたという事実は、変わらない。あの人はその分だけはきっちりと私をしかるだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

魚がひどく気がかりになってきた。あのかわいそうな小さくていたいけな魚は、あのまま水の中で放置されてしまうのだろうか。なんだか律は息が苦しくなるように感じた。もったいない、というよりも、その使命を果たすことなくお払い箱になってしまうだろう小さな魚に申し訳なく感じた。帰る気持ちには到底なれない。何か得体の知れない、少なくとも楽しい側ではない、すえた匂いを含んだ思いが、律の頭の中でぐるぐるとまわりだす。魚は、魚は、と魚ばかりがくり返し言葉として頭の中で形づくられ、そのうち自分がとんでもない迷路に迷いこんだようで、怖くなってきた。律には変な癖があって、いろんなものを自分に置き換えてしまっては気持ち悪くなったりするのだった。あの魚が自分に思えてしかたなかった。本当にそうかもしれない。じゃりり、と足の下で小粒の石達がつぶれて弾ける音をたてた。ゆっくりと、家とは反対の方向へ歩き出す。ぬるぬると鉛色によどんで動いてゆく川に沿って、やけに長くて神経質に細い影をひきずりながら。燃えさかる空は、今まさに大輪の朱の花だった。紅鮭のウロコだなァ、と思ってすぐに、何故今日はこうも魚なのだろう、と律は我れ知らず口の端を歪ませていた。遠く山の辺に背くら

べのように突き出した煙突から真っ黒いけむりがいくつもあがり、空に薄墨を吐いている。カアンカアンと、終業を知らせる鐘の音が、風にのって流れてくる。今日は土曜だ。うまくすれば父親はもうすぐ帰ってくる。新しい母親は父親より早く帰ったためしがない。彼女は専売公社に勤め、無感動な瞳でこの方が楽だからと灰色の作業服のまま一見すると幼稚園児のような風体で帰ってくる。妹達はつんとほおずきのような口唇をつきだして、お母さん、それ恥ずかしいからやめて、と言ったが、律はこの新しい母親のそんなところだけは何故か好きになれた。再婚した当初は派手好きで厚化粧で、せまい町のことだからいろいろとウワサにもなりはしたが、今はすっかりおさまって、この町の一部として彼女は生活している。灰色の制服にのっかる、黄土色できつい線をいくつかひいた生活の顔。そんなふうになってしまってから律はすっかり諦めている。もう、拒絶することはできない、と。初めて彼女が家を訪れた時彼女が、あたしは初めての結婚だから家の中のことやなんかはあんまり上手に出来ないけれども頑張りますからよろしくね、と言って松葉のように細くかかれた片一方の眉を変なふうにあげながら笑った、あの時の感じ。永遠に続

くかのように見える細い道の始まりに立って、さあ歩いていけと言われたような、あの恐怖感を思えば、今の、この状態なんて。そうして春夏秋冬、どうにかして一年をやり過ごし、今度は新しい恐怖が律をおびやかすようになった。日が暮れ夜が明けるように、日毎に女に変わってゆく妹達。一年前の不格好にけばけばしかった義母に、彼女達は写しかわってゆく。ブレた青写真が焦点をあわせ色をのせていき、いつか彼女達は本当にそのものになってしまうだろう。そしたら私はどうしたらいいのだろう。律は、まるで自分が宙ぶらりんでいる気がした。

しばらく土手を歩いていた。太陽の黄金のきっ先が川面に切りつけていたのが、いつの間にか川底に溶けて、薄闇がひっそりと伏し目がちに山の辺に佇んでいた。あまりにしめやかに行われたその変化に思わず立ち止まって足許に目をやると、ついさっきまでキリキリ自分に喰らいついていた影がすっかり消えて、白っぽいほこりにまみれたつっかけを縁どるように、気配だけがうずくまっていた。川沿いの家からは、夕飯の仕度が水から火へ移ったらしく、それぞれの優しく温かい匂いがゆうるりと漂ってくる。どの家にも穏やかな灯りがともり、どの窓から洩れ聞こえて

くるのか、ラジオかららしい雑音のひどい流行り唄が律の耳に滑りこんできた。

〈夢を見たいという人の
寝顔をぼんやり眺めてる
あなた今何夢見てる
私の夢は見るでしょか……

小鼻の斜め下に大きなまんまるいほくろのある歌手の、苦節十年目にしてようやく花開きましたという演歌だった。そのまんまるいほくろと苦節十年という謳い文句が嫌いで、普通なら歌を覚えることが好きな律も、この歌だけは歌詞をよく覚えていなかった。目的地があるわけでもないので、何とはなし歩き出さずに歌を聞いていると、二番のサビが始まった。

〈夢を見たいというけれど

夢は儚いしゃぼん玉
それなら私は何んでしょか
私の夢はどこでしょか……

すぐに頭の中で形づくられるような、易しい旋律だったので、歌が終わるとサビの部分を繰り返し口ずさみながら律はまた歩きだした。なんだかとてもいい唄だと思えて不思議だった。ぽつぽつとネオンのつきだした商店街の入口が視界に入ってきた。そこにはアーチのように弧を描いて商店街の入口を示す看板があったが、〝商店街〟の〝店〟の字の接触が悪いのか、夜になって看板に電気が入ってもそこだけ灯りがつかなかったので、その下をくぐるたび律はなんだか歯ぬけのおばあさんのようだと思ったりした。今日もそれは変わりがなかった。

瞬間、小さな雷が自分を打ったかに思えた。演歌の軽々しい無責任な哀しみを伴った旋律が、あっという間に張りつめられた緊張の糸でもって断ち切られてしまった。律はただ、びっくりしていた。今日の秘やかな苛立ちの原因の栗色の髪の少女

が、今しも〝店〟の字のない看板の下を軽やかにくぐりぬけて入ってゆくところだった。隣のクラスに可愛い子がいる、とクラスの男子達が騒いでいたのは知っていた。女子達は、やあね男子ってこうなんだから、と笑いながら内心小さな牙を隠していたが、クラス内で男女あわせて二番目に背の高い律にはあまり関係のない話だった。というよりクラスで唯一の律よりも背い高のっぽさえ静かであれば、他は別にいいことだった。背い高のっぽが隣のクラスの話題の少女を好きらしいと聞いたのは今日だった。今まであまり自分の身長や真っ黒い髪をうとましい等と感じたことはなかった。初めての思いに我ながら愕然とした。自分が女という生き物なんだと身体の真ん中から知らされてしまった。とうとう、わかってしまった——。

想いに沈みながらも、律はさっきの倍の速度で歩き始めていた。見失わないように。気付かれないように。夕陽の中で影が追いすがって来たように、今、律は夜の闇の中で影となっていた。何故つけてゆくのかわからなかった。少女は私服だった。他校の生徒らしい少女達と一緒に、シロツメクサのような含み笑いを散らした横顔が、商店の蛍光灯に照らしだされながら進んでゆく。ふっとその横顔がこの町では

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com